小さな水車で発電 加工所を生かして仕事づくりを

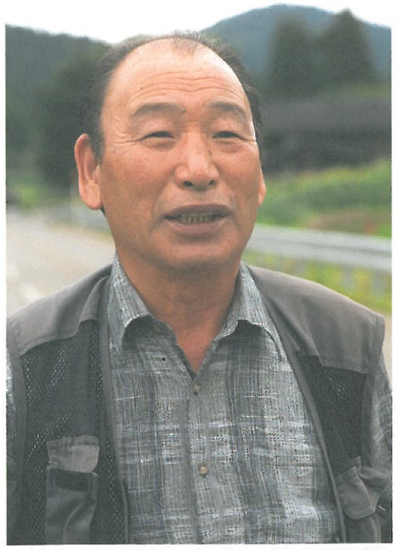
文＝平野彰秀（岐阜県郡上市石徹白）
写真＝大西暢夫

ザー、バシャッ、バシャッ、バシャ、バシャ、ザ、ザ、ザ、ザ……。

水しぶきをあげて、水車が勢いよくまわりはじめた。続いて、点灯式。デモ用の電球が灯される。２０１１年６月19日、石徹白（いとしろ）地区の農業用水路に設置された「上掛け水車型小水力発電」のお披露目式が開催された。直径３ｍ、最大流量毎秒１５０ℓ、最大出力２・２キロワット。発電した電気は、隣接する農産物加工所に送られる計画である。

石徹白地区自治会長である石徹白勉さん（以下、勉さん）は、この加工所と上掛け水車を、地域再生のシンボルにしたいと考えている。加工所は、郡上市から自治会が指定管理を受けて管理しているのだが、電気代の負担が大きく、稼働させないほうがましという状況にあった。まずは、上掛け水車により電気代の負担を下げる。同時に、特産品開発を行ない、加工所を稼働させる。将来的には、飲食店や青空市も併設して、道の駅的な機能をもたせることによって、地域に仕事をつくり、人口減少を止めるというのが、勉さんの描いている夢である。上掛け水車の設置は、その第一歩なのだ。

特産品の開発についても、今年の夏はじめて、名産品であるトウモロコシのハネ品を使った乾燥品の生産がはじまった。上掛け水車が回りはじめたのと同時に、地域再生の歯車が、回りはじめたのである。


自治会長の石徹白勉さん。広い懐で、外からの移住者を受け入れる、地域のリーダー

「30年後も小学校を残そう」

岐阜県郡上市白鳥町石徹白。福井県との県境に位置する、標高７００ｍの集落である。国道から標高９５０ｍの桧峠を越えて、スキー場を３つ越えたさらにその奥に位置する。縄文時代より続いているこの集落は、かつては白山信仰の拠点として栄えていたが、昭和30年代の１２００人をピークに人口は減少の一途をたどり、現在では３００人を切るまでになってしまった。現在、地区内唯一の学校である石徹白小学校は、全校児童が12人と、存亡の危機にある。

勉さんは、このような状態を憂い、なんとか地域を復興させようと活動を続けてきた。２００３年に「ＮＰＯ法人やすらぎの里いとしろ」、２００７年には「石徹白地区地域づくり協議会」を設立し、「30年後も石徹白小学校を残そう」を合言葉に、地域づくり活動を行なってきた。そのような活動のなかから、この小水力発電の取組みは始まった。

むらとまちの思いが重なって

２００７年夏、私は、ぎふＮＰＯセンター理事長代行（現・理事長）の駒宮博男さんや、岐阜市のまちづくり仲間とともに、はじめて石徹白を訪れた。当時、私たちは、岐阜の若者たちで集まり、「地域の持続可能性」について、青臭い議論を交わしていた。「都市部が持続可能であるためには、自然資源をもっている農山村が持続可能である必要がある。エネルギー・食糧・お金などの、地域内循環の仕組みをつくり、持続可能な小地域をつくることが、地球全体の持続可能性につながる」。そんな話をしていた。

はじめての石徹白で、私たちは、勉さんをはじめ、地元ＮＰＯの人

石徹白集落遠望。標高700ｍの山中にぽっかりと開けた集落。写真＝船戸鉄夫

直径3m幅1mの上掛け水車。羽根は地元の杉材を使っており、壊れても交換が可能。農業用水路から水を引き込むバイパス水路に設置した